

たまたま心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくとく
の粟を侘て一炉の備へいとかるし。はた昔住けん人の、殊に心高
く住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持仏一間を隔て、夜
の物おさむべき処などいささかしつらへり。

さるを、筑紫高良山の僧正は加茂の甲斐何がしが巖子にて、此
たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞。いとやす
やすと筆を染て、幻住菴の三字を送らる。頓て草菴の記念となし
ぬ。

【大体の意味内容】

たまに、元気のある時には、谷の清水を汲んできて、自分で炊事をする。西行法師が「とくとく落つる岩間の…」と歌ったあの「とくとくの粟」ほどの侘びしさを慕って、自分もただ一つの炉の他にはなんのしつらえもせず、まことに軽々とした暮らしである。また昔ここに住んだという幻住老人も、まことに心高く住まわれたので、ごたごたと風流めかして小細工を弄したものが一つもない。ただ朝夕礼拝する持仏を安置する一間だけを別に取り、夜具を入れるところだけ少し設けてある。

そんなふうには、何一つ特別なものはない草庵であるが、九州は筑紫高良山の僧正で、加茂神社の甲斐なんとかさんのご令息である方が、このたび京にのぼっておられると聞いた。書道の大家である寂源僧正という方で、ある人を介して額の揮毫をお願いしてみた。するとたいそう気軽に「承諾なされて、」幻住庵」の三字を書いて送ってくださいました。そ

のまますぐに、草庵そうあんに掲げかかて記念きねんの表札ひょうさつとしたのである。

。松